

# 中日青葉学園複合施設20周年

## 青葉通信

第26号

発行

社会福祉法人  
中日新聞社会事業団  
中日青葉学園  
電話 0561(72)0134

### 児童養護施設あおば館

### 児童心理治療施設わかば館

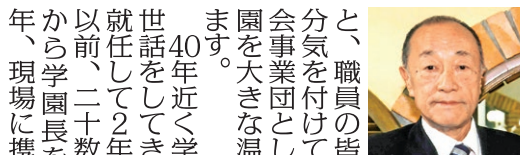
中日青葉学園が複合施設となつて20年が経ちました。すなわち、中日青葉学園「わかば館」が誕生して20周年を迎えたこととなります。

平成10年の児童福祉法改正により、虚弱児施設から児童養護施設に種別変更となり、分校を併設する中日青葉学園は岐路に立たされました。「このままでは分校存続が危ぶまれる」「分校がなくなってもよいのだろうか」皆、危惧していました。そんなとき、学園創立40周年にあたり園舎全面建て替えの話が持ちあがりました。当時中日新聞社会事業団の事務局長だった故鈴木周作さんから、現場責任者に建て替える機に人事交流のできる複合施設にする提案がありました。皆で議論しました。出された結論は、複合施設として児童養護施設と情緒障害児短期治療施設（現 児童心理治療施設）を併設させることにより、学園の特



色の一つ「教育機関の併設」を存続させることができるので、この案が一番望ましいということになりました。理由としては、①情緒障害児短期治療施設併設に伴い、既存の分校が活用できること、②児童養護施設に入所する児童にも教育のネグレクトを受けている児童も多数おり、そのような児童を救済できるという特色を打ち出せること、が挙げられました。当時を振り返ってみると、建て替え前に様々な改革を行ってきたこと、大変だったことを思い出します。まず、①連泊制だった勤務体制を見直し、1泊制に変更。②母体である中日新聞社会事業団とタイアップし、ボ

色短中期治療施設への転勤）に対する導入を行っていききました。平成14年10月から着工し、旧建物に住みながら工事を進め



### タフで優しく

中日新聞社会事業団 理事長 河津市三

コロナ禍がひと段落したとはいえ、インフル、プール熱など難敵が漂っています。子供たちはもちろんのこと、職員の皆さんも体調管理には十分気を付けてください。中日新聞社会事業団としても引き続き、青葉学園を大きな温かい目で見守っていきます。

40年近く学園の現場で子供たちの世話をしてきた寺井さんが学園長に就任して2年近く経ちました。それ以前、二十数年にわたって中日新聞から学園長を出してきました。長年、現場に携わったプロパー職員を

それぞれスタートしました。「あおば館」の20年は、激動の20年でした。平成25年に女子ホーム「しらかば」を幼児ホー

平成26年に男女ホームと4人部屋2室を2人部屋4室にリフォーム。平成31年に男女ホームとも2人部屋4室を1人部屋

「あおば館」は、中舎で男女各2ホームで17、18人。幼児から高校生までの縦割り、定員70人。「わかば館」は大会で男女2ホームで17、18人。小学生から高校生までの縦割り、定員35人でそれ

6室にリフォームし、女子ホーム「あさぎ」は14LDK定員18人、男子ホーム「もえぎ」は13LDK定員17人となりました。その間「わかば館」は、平成30年4月から種目変更し、情緒障害児短期治療施設から児童心理治療施設となりました。

この20年、中日青葉学園は、多くの方々から支援を受けながら開かれた施設となるように努力してきました。しかし、いつまでも受け身のままで地域の拠点や情報の発信基地にはなりません。当園としては、4年前から里親啓発活動を含めたフォスタリング事業を始めたことで各所で中日青葉学園を知ってもらうことになりました。5年度新たな取り組みとして、11月からフードドライブ・フードパントリーを始めました。これを地域貢献の足掛かりとして、近いうちに子ども食堂も開所したいと考えています。中日青葉学園が、地域から必要とされ、愛される施設となることを願っています。やみません。これから中日青葉学園の取り組みを見守ってください。

(学園長 寺井陽一)





# 生え抜きトップスリー鼎談

寺井学園長

倉橋あおば館長

武弘わかば館長



**寺井** 学園の旧職員住宅に住んでいたのが縁で、学園新卒職員が3か月で辞めた後に小学校の先生から転職した。施設の職員は子どもに何かをやらせるだけではなく子どもと一緒にやりたかった。平成10年、虚弱児施設が

**倉橋** 大学の専門は障がい者で就職先も決まっていたが、実習先が養護施設になったばかりの青葉学園で世話になった寺さんから引張られて青葉

にきた。大学の先生にめっちゃくちゃ叱られた。青葉で実習した時は不登校のイメージだったが、就職したら虐待の子が増えてきた。**寺井** 養護施設になって2年たつたころ、老朽化した園舎の建て替えの話が出た。大舎だったのを中舎にし、学園が敷地内に置いた小中学校の分

校を活かすには、心理治療施設を併設するのがいいということになった。**倉橋** 平成12年に就職して間もなく建て替えの話が出て、15年に養護施設あおば館と治療施設わかば館の複合施設になった。これだけ大きなプロジェクトが進んだ。**武弘** まだ虚弱児施設のころの青葉で実習し、その後もボランティアを続けていて、卒業後、他県の施設に就職したが、青葉学園が複合施設になる時に職員募集していたわかばで採用された。

**寺井** あおば、わかばと2つの施設になり職員が増えた。**倉橋** 青葉でボランティアしていた人が寺さんに引張られて何人も入ってきた。**武弘** 寺さんはボランティアの協力で青葉まつりなど行事に力を入れていた。**寺井** 子どもたち



寺井学園長

を積ませたいと思っていたし、ボランティアは外部の目を入れることができるから。中舎は大舎と小舎のいいとこ取りをした。調理で作ってもらった食事を男女別4つのホームへ運び温かいご飯を食べ、1つのお風呂に男女交代で入っていたのをそれぞれのお風呂に入り、各ホームで生活が成り立つようにした。**武弘** 青葉で実習した時は大舎で、小学生は4時ころ風呂に入り、グラウンドで遊び汗まみれになってご飯を食べた後で、消灯だった。わかばで事務と児童指導を兼務していたけど、対応の難しい子が多かった。今でいうと発達障害かな。

**倉橋** あおばもわかばも子どもたちのケアが大変だった。**寺井** 両親の離婚、貧困などの養育困難だけでなくネグレクトや虐待の子が多くなった。建て替えのころは工事現場のすぐ隣で生活しているので子どもたちが荒れたということもある。**倉橋** それぞれ違う環境で親の愛情を受けずに育ってきた子どもたちが一緒に1つのホームで生活するわけだから。**寺井** 起床から就寝まで17人ほどの子どもをほとんど職員1人でケアする。朝起こすときは、前の晩に「明日は何時に起きるの?」と、動機付けするとか、工夫がいる。**武弘** 子ども同士、子どもと職員のトラブルをきっかけに子どもが無断外出することもあった。**倉橋** 警察に届けて手分けして捜した。実家のあがなかったが、学園名が入った車を見たようでした。ケースがあった。

**寺井** あおばができた時、指導課長になった。あの当時は、大舎をやめて中舎にしたのは画期的だと思った。**武弘** 養護の子と治療の子が一緒にいることでのトラブルもある。**倉橋** 建物は別だが、分校では同じ教室になり、同じグラウンドで遊ぶからけんかはよくある。**武弘** 職員は自分の担当の子を優先するので子ども同士のけんかでは、よく話し合う必要がある。**倉橋** 子どもの無断外出、行事などでは、両館の職員が協力し合っている。

昭和35年、虚弱児施設で開設した中日青葉学園は平成15年10月、児童養護施設あおば館、児童心理治療施設わかば館の複合施設として再スタート、令和5年、20年を迎えた。学園長は中日新聞社出身者があおば館長を兼務していたが、令和4年7月、わかば館長の寺井陽一が学園長兼務となり、あおば館を退職後、ファミリーホームを運営している倉橋幸彦があおば館長に、令和5年4月、わかば館から社会事業団へ出向していた武弘和通がわかば館長に就任、寺井学園長、倉橋あおば館長、武弘わかば館長と生え抜きトップスリーが誕生した。青葉学園を知り尽くした3人が学園のこれまでとこれからについて語り合う。



倉橋あおば館長

**寺井** 職員が深夜まで自分を捜していることに気づいたんだ。**武弘** 精神的に不安定になり、自殺を図った子もいた。職員が注意していたので発見が早くて大事には至らなかった。





武弘わかば館長

ともある。

**倉橋** 分校では、子どもたちが小グループで発達段階にあった教育を受けられる。

**武弘** わかばは治療施設なので全員分校だが、あおばでは、本校に適した子は本校へ通学する。本校は、多くの子と一緒に勉強したり遊べるので社会性が身につく。

**倉橋** 分校の子も運動会などの行事では本校へ行き交流はある。

**寺井** 分校も平成18年、建て替え、30年には特別教室棟を増築した。青葉の職員は分校の先生と子どもの情報を交換、共有、連携を深めることが大切だ。

◆ ◆ ◆

**寺井** 虚弱児のころは、中学卒業を機に退所する子が多かった。帰る家がない子は就職した。

**倉橋** あおばになったところから学園から高校進学するケースが増え、さらに大学へ入る子も出てきた。担当する高校生の進学希望を叶えるため、奨学金の仕組みができた。

**武弘** 社会事業団に在籍していた時、寄付金を返済する奨励金に充てる基金を作り、平成24年、スタートした。途中退学したケースがあるが、大学を卒業して保育士や福祉職に就く子もいてうれしい限りだ。

**倉橋** 家庭養護をしたくて24年、東海市でファミリーホーム「くらちゃんハウス」を立ち上げた。**寺井** 職員だった奥さんと2人抜けて痛かったが、出産のほか必要がある時はよく応援に行っていた。

**倉橋** 武弘さんには事務費申請など県への書類作成でも助けてもらった。**武弘** 学園としてファミリーホームと連携するのはいいことだ。

**武弘** あおばが中舎になって間もなく、国は里親中心の家庭養護を打ち出し、施設は1グループ6人の小規模化が求められるた。

**寺井** あおばは、平成25年から小規模化に取り組み、中舎4ホームを小規模4ホームに変え、分園として小規模2ホームを作る。

**武弘** 社会事業団の都合で平成26年、法人事務局へ異動した。法人本部も社会福祉法改正で福祉充実計画を立てることになり、資金的に学園小規模化を進めやすかった。

**倉橋** あおばはホームが6人になって子どもたちは落ち着いている。職員は手厚いケアができる半面、子どもから求められることが多く、仕事量は増えている。

**武弘** 養護と治療の複合施設で同じ敷地内にあるのは全国でも数が少ない。**寺井** 平成29年、大先輩の近藤さんが退任後、わかば館長になった。子どもを管理する傾向が強いが、子どもの声をよく聞くよう努めている。運営の難しさがあるが、いいところもある。

長から希望を聞かれ「現場の仕事がしたい」と伝え、9年ぶりに学園に戻った。

**寺井** 4年6月、学園長兼あおば館長が退任して、学園長を兼務した。**倉橋** 3年、武弘さんに声を掛けられ学園に復帰、施設長資格を得て、4年7月、あおば館長になった。ファミリーホームは6年3月で休止、里親をする。この先、法人型ファミリーホームをやりたい。

**寺井** あおばは里親重視の国の方針に合わせ、里親支援にも力を入れている。

**武弘** 分園の三つ葉管理棟に県の委託を受けフォスタリングセンターを設け、専属職員が啓発活動などに当たっている。

**寺井** 5年4月、専門職の児童自立支援専門員となり学園長を専任、わかば館長は武弘さんが引き継いだ。

**倉橋** 寺さんは退所した子のアフターケアを続けている。今、何人いるの。**寺井** 22人。最年長は44歳。就職して対人関係がうまく取れず辞めたあと、まずは住むところを確保、次に仕事先を見つける。保護司をしているけど、こちらは決まった時間に面会する。青葉の場合は時、所かまわずだから。今も、ロビーで待

っている子がいる。助けを求めてくる子の力になりたい。そうでない子は心配だ。**武弘** 小規模化の後、一時保護専門ユニット、児童家庭支援センターを設ける計画だが、自立援助ホームを考えるのもいいかも。

立ち上げ、地域との連携をさらに進めていきたい。

**武弘** 企業内託児のような産育休明けでも働ける仕組みを設け、青葉で育った職員が辞めていくのを防ぎたい。**倉橋** 施設コンプレックスが強いと思う。施設に目を向けてくれる人もいるので子どもたちが積極的に地域へ出ていけるよう後押ししたい。子どもは地域全体で育てていくことが必要だ。

**寺井** あおば、わかば、三つ葉、分校が地域児童福祉の向上に寄与できるように力を合わせよう。



### 館長就任あいさつ



わかば館の開設と共に中目青葉学園に入職し、20年が経ちました。その間、両館の指導員、事務員、本部職員と様々な仕事を経験。中日青葉学園の入所児童だけでなく、高齢者、障がいをお持ちの方、支援者やご家族の皆さまとたくさんのお話をする機会を頂きました。

この経験をもとに、児童養護と児童心理治療施設が併設する中日青葉学園が、入所児童

### 20年表彰



家庭も体も大切に

あつという間の20年。児童のことだけでなく、施設のことでもいろいろな経験させて頂きました。家庭ももっており、体も大切にしながら30年、40年頑張っています。学園フォスターリングセンター 阿尾匡晃

### 成長継続を

20年前、仕事に慣れてきたころ。当時、療育部長でいらした近藤日出夫先生に「この仕事は10年やって、やっと始まり」と言われました。「先は長いな」と思ったことを覚えています。20年経った今「継続は力なり」を実感しています。青葉も成長しています。自分も負けないよう、成長を継続していきたいと思っています。

あおば館 鵜飼直樹

### 感謝の20年

幼児対応の20年。年齢相応の発達を視野に入れ、知育保育を基盤に対応してきた。健常児から発達障害児と幅広い保育だったが、相乗効果でお互いに心身ともに育つことを目の当たりにした。人は素晴らしい。無限の可能性を秘めている。子どもたちから育ててもらった20年間。感謝しかありません。あおば館 角谷ひとみ



## 第25回 青葉まつり

今年も係となり、職員には会議の場で、地域やボランティアの方々に「おもてなし」の気持ちでやるように伝えました。コロナが5類に移行したことで、昨年は6割程度ながら今年は8割程度の規模に。チラシの配布は岩崎地区にまで広げ、ボラン



ティアさんにもたくさん来ていただきました。来賓に近藤裕貴日進市長Ⅱ写真Ⅱに来て頂き、開会式で挨拶をしていただきました。祭りではお楽しみ抽選会も復活。複合施設20周年を受け、各団体へ感謝状を贈呈し、学園はたくさんの方に応援してもらっていることを改めて感じました。来年は完全復活を目指します。



## 卓球大会

令和5年8月に開かれた愛知県児童福祉施設長会球技大会卓球大会で、中日青葉学園Aチームが団体戦で優勝しました。決勝の相手は中日青葉学園Bチーム。切磋琢磨したチーム同士の決勝でした。



個人戦では、中日青葉学園の子どもたちが中高生女子の部で表彰台を独占しました。この優勝は、夏の厳しい練習の成果であり、子ども

## 竹の子会

緑綬褒章受章



学園開設当初から子どもたちに理美容奉仕を続けているボランティア団体・竹の子会（加藤政和代表）が緑綬褒章を受け、令和5年11月、加藤さんが皇居での授賞式に出席した。6年1月15日、学園でお祝いの会を開き、皆さんの奉仕活動に感謝した。



## フードパントリー MITSUBAスタート

6月に日進市がフードバンクで集めたものを配布する場所がないという話を受け、学園でもフードパントリーの開設に向けた準備を始めることになり、まず公式LINEを開設しました。次にどのよう



な家庭にどう配布するのか、市社会福祉協会の定例会議でヒントを得、市子育て支援課を通じて、児童扶養手当世帯を対象にしました。食品を青葉まつりでフードドライブし、まつりでも知り合

うな家庭にどう配布するのか、市社会福祉協会の定例会議でヒントを得、市子育て支援課を通じて、児童扶養手当世帯を対象にしました。食品を青葉まつりでフードドライブし、まつりでも知り合



## フォスティング事業

里親重点エリア啓発及び研修事業は、4年目を迎え、令和5年は一宮市、日進市、東郷町の3市町で実施となりました。東郷町はらぽーとで、一宮市は商店街のイベントを中心とした啓発を、日進市では施設の拠点をい



かししたcafeを始めました。里親さんも多くなってきました。里親希望者も来て、雑談をしたり、2階の

プレールームで里子が遊んだり新しい取り組みができるようになりました。三つ葉の地域交流棟が活用できるのは大きく、里親さんのフォロー



## 新人紹介



人となりがりやを大切に

わがば館児童指導員 永松紗英



仕事に全力で取り組み、

わがば館保育士 八木怜奈



子どもたちとお話

あおば館児童指導員 仲田雪乃



自分らしさを大事にし、

わがば館保育士 金谷直哉



日々の時間を大切に、子どもたち

あおば館 保育士 小川怜平



社会人一年目を中日青葉

あおば館事務員 志水愛美